夢の又夢

巻之二

津本陽

文藝春秋

夢の又夢

第二巻

津本陽

文藝春秋

夢のまた夢　第二巻

一九九三年一〇月二〇日　第一刷

著　者　津本陽

発行者　阿部達児

発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三　郵便番号一〇二
電話東京（〇三）三二六五局一二一一

印刷　大日本印刷　製本　大口製本
定価はカバーに表示してあります
万一、落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取替えいたします
小社営業部宛お送り下さい

©Yô Tsumoto 1993　Printed in Japan

ISBN4―16―505320―1

目次

小牧長久手　5
関白任官　161

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

夢のまた夢

第二巻

装画　村上　豊
装幀　番　洋樹

小牧長久手

安土にむかう秀吉供奉の先備えは、加藤作内、木村常陸介の率いる江州衆。

旗本は加藤清正、福島市松、片桐助作、脇坂甚内、糟屋助右衛門、加藤嘉明、増田右衛門、福原右馬助ほか馬上衆百五十余人。

賤ケ岳で比類ない高名をたてた秀吉秘蔵の荒小姓たちは、具足に身をかため、馬上槍を中間（ちゅうげん）に持たせていた。

秀吉は平服でアラブ種の駿馬に乗り、傍には浅野弥兵衛、一柳市助、蜂須賀彦右衛門（小六）、前野将右衛門、神戸田半左衛門、堀尾茂助、長谷川藤五郎、堀久太郎、蒲生氏郷、仙石権兵衛、桑山重晴の十一将が両脇に従う。

つづいて堀尾茂助鉄砲隊五百余人。後備えは蜂須賀家政、生駒甚助、蜂屋頼隆の手の者一千二百余人である。

織田三郎秀信と信雄への進物は、駄馬十二頭で運んでいた。

秀吉は京都に一泊し、翌朝近江野洲川常楽寺に入った。

「弥兵衛、一白、修理。そのほうども先駆けして安土へ参ってくだれ」
浅野弥兵衛、富田一白、桑山重晴が安土城への使者を命ぜられた。
「儂はちと腹痛を覚え、ここ常楽寺にて小休みいたす。ついては、明日午の刻（正午）までにはかならず登城いたすゆえ、なにとぞ一日ご延引のほど伏して願いあげ奉ると、先方に口上をいたせ」
弥兵衛らは、安土城で秀吉暗殺の謀計がすすめられているのを知っていた。
彼らはさっそく馬を走らせ、安土城へ出向いた。
三人は大書院に案内され、滝川三郎兵衛に会い、秀吉からの伝言を伝えた。なりゆきしだいでは弥兵衛たちの首が飛ぶかもしれない。
信雄は午の刻を過ぎても秀吉があらわれないため、癇癪をおこしていた。
浅野弥兵衛は泰然として口上を述べたのち、滝川に申し出る。
「われらは中将さまに拝謁をお願いいたしとうございまする。主人筑前守には、中将さまじきじきにお許しを頂戴して参るよう申してございまするほどに」
滝川三郎兵衛は、信雄にその旨を注進した。
「さようなる者どもに、目通りを許すつもりもないわ。早々に追いかえせ」
信雄は苦々しげにいいすてたが、滝川はたしなめた。
「あの者どもを追いかえせしならば、筑前はますます疑い、安土に近寄らぬやも知れませぬ」
信雄は性来の因循の性格をあらわし、ためらうばかりであった。
滝川は懸命に説得する。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「浅野弥兵衛ら三人の使者は、大書院にあい控えおりまするに。理非はさておきともかくもこれらの者どもに御謁見なさらねば、なおもって明日の会見用心いたしまする。筑前の様体にお気遣いあって御見舞の言葉をもなされなば、登城をいたすでござりましょう。

なにとぞ平常のおよそおい御出座これあって、使者にお目通りあるよう願い奉りまする」

信雄は滝川のすすめに従い、大書院に出て使者の口上を聞いた。

「筑前殿にはあいかわらずの忠節、かたじけなきかぎりでや。そのほうども帰着しだい筑前殿に明日の会見祝着至極なる旨、あい伝えてもらいたい」

浅野弥兵衛は威儀をただして御礼を述べた。

「かたじけなき御諚しかと、うけたまわってござりまする。われらが主人筑前に申し伝え、よろこばせまする」

千軍往来の弥兵衛らは、敵の手中に身を置いてなお、余裕綽々の進退を見せた。

翌日巳の四つ（午前十時）、秀吉は安土城大手門の三町先、町屋口山下に到着し、行列を停めた。

秀吉は浅野弥兵衛に、目くばせをする。

弥兵衛は十二頭の駄馬に積んだ進物を宰領し、先行して御馬場先に出向いた。

会見の場には、三郎秀信と信雄が床几に腰をおろし、待っていた。

弥兵衛は秀信家老衆に進物を渡し、信雄の前に出てひざまずき、口上を述べる。何事をいうのかと、聞き耳たて静まりかえる信雄の群臣を弥兵衛はかえりみもせず、陣馬で鍛えた力づよい声音であった。

「主人筑前儀、御城下まで罷り越し候ところ、あらぬ風評を耳にいたし、御馬場先に入るをため

らいおりまする。それがしどもは万一の出来をおもんばかり候えども、筑前警固の小姓どもは陪臣にござりますれば、畏れ多く、中将さまが御前まで付き添いかねまする。
しからばこなたさまより御警固の人数差しむけ、御案内願い奉りまする。これは筑前守たっての所望にござりまする」
滝川三郎兵衛をはじめ、津川玄蕃、浅井田宮丸、岡田長門守は顔を見あわせ、秀吉の心中を計りかね、弥兵衛を待たせ相談する。
「ここは筑前が申すようにいたすより、ほかはあるまい。飛んで火に入る虫というが、智謀の筑前にいかなる計略のあろうとも、首にしてやるだわ」
秀吉が信雄の家来に大手門までの警固を頼んだのは、世間の噂をおもんばかったためである。
彼は蜂須賀小六ら幕僚に告げた。
「このたびの会見は、さながら火中の栗を拾うがごとき危うきことでさ。さりながら三郎君への年頭の嘉儀を、いまさら取りやめもならぬ。われらの家来は、大手の門より内へは入れぬが、このまま後を見せなば、織田恩顧の諸大名が何と取り沙汰いたすやも知れまいでや。されば先方に出迎えを願い、大手まではおだやかに参ずるがよからあず」
半刻（一時間）ほど待つうち、滝川三郎兵衛と津川、浅井、岡田の三家老が、六十四人の馬廻り衆を伴い、町屋口へ出迎えにきた。
岡田長門守が秀吉のまえへ進み出て、色代をする。
「本日は遠路のところ御登城、主人にはご満足少なからず、拙者ここまでお迎えに罷りいでてござりまする」

秀吉は満面を皺ばませ、にこやかに応じる。
「ご丁重なるお出迎え、恐れいりし次第にござる。早速に参向申すべきところ、急病のために一日延引の段、御前によろしくおとりなし願わしゅう存ずる」
行列は進み、大手門に達した。
門内へは、秀吉の幕僚五人のほかは入ることを許されない。
滝川らはいまこそ秀吉を討ち取ろうと、殺気立つ馬廻り衆を眼でおさえる。
そのとき、思いがけないことがおこった。
加藤清正、福島市松、糟屋、片桐らの荒小姓が、岡田長門守の制止も聞きいれず、門内に押し入ってゆく。
「これは狼藉なり。無礼至極でや。待たぬか」
門を固める信雄の軍兵たちが懸命にさえぎろうとするが、大身の鎌槍を脇に抱え、烏帽子兜を輝かせ大股に踏みいってゆく加藤清正の前途をさえぎる勇気はない。
岡田、津川が秀吉のまえに進み出て、声を荒げ咎めた。
「ご家来衆のふるまいは、無礼も極まってござる。お停め下され」
秀吉は、さきほどまでのにこやかな表情を消し、鏃のようなするどい眼差しを向けるのみである。
秀吉の両脇に控えていた蜂須賀小六、前野将右衛門、浅野弥兵衛が、かわって岡田に答えた。
「これは主人筑前の、いっこうに存ぜぬことにござる。実は御城下にて異なる風聞を耳にいたし、若者ばらが主人に内証にて取りはからいしことにござるでや」

弥兵衛は小六、将右衛門とともに岡田を睨めすえる。
「世上にては、登城を見はかろうてわれらが主人筑前を討ちとらんが沙汰はあきらかなれば、若者ばらが主人の危難を救わんものと勝手にふるまいし所行にござるでや。この者どもは主人のためなれば、冥土までもお伴つかまつらんと覚悟いたしてござる。失礼の儀これあらば、じきじきにお尋ねありて、御門の内より退去を命ぜられ候え」
岡田、津川、浅井の三家老が清正らに歩み寄ろうとしたが、二十余人の荒小姓が長槍を抱え、四辺を睥睨するさまを見て、思わず立ちすくむ。
彼らは岡田にむかい、いまにも歩み出そうとするかのように、眼をいからせている。三家老は気勢に押され、あとずさらんばかりであった。
玄関式台前にいた滝川三郎兵衛、生駒八右衛門、小坂孫九郎、関甚五兵衛、中川勘右衛門らは、信雄に様子を注進した。
信雄は顔色を変え、声をふるわせる。
「さては謀計の露顕いたせしか。是非もないことでや。しからば今日の会見は見合わするといたそうず」
彼は床几を立ち、急ぎ足に城中奥殿へ逃げいろうとした。
滝川ら重職の者は、信雄を押しとどめた。
「おちつきなされませ。取り乱しては御一門の恥にござりますぞ。筑前とのご対面なくば、先行きお家のためによろしからず」
懸命に諫めるが、臆病な信雄は聞きいれず、前に立ちふさがる重臣どもを押しのけ、城中に戻

ってしまった。
「かくなるうえは、是非に及ばぬ」
津川玄蕃は、秀吉の前に出てことわりを申しのべるよりほかはなかった。
「遠路のご入来、信雄さまにはまことに御満足に存知なされ、すみやかに御対面あるところ、今朝よりにわかに所労あい加わり臥せおりまする。よってよろしく申すべしと聞かされてござりまする」
秀吉は傍の堀尾茂助に命じた。
「貝を吹け」
茂助は合図の大貝を吹き鳴らす。
蜂須賀小六、蜂屋頼隆、仙石権兵衛らが千二百挺の鉄砲隊に下知して、総勢二千余の人数を率い、大手門より乱入した。
砂煙をあげて馬場先に溢れた軍兵のいきおいに、秀吉の討手として物陰にひそんでいた土方勘兵衛、森久三郎、飯田半兵衛、堀川五左衛門らは、身動きもとれない始末であった。
秀吉はその日のうちに悠々と坂本に帰城していった。
秀吉との会見をなすことなく、安土城を引き払った信雄が居城長島に帰ったのは、正月十四日であった。
家中の諸侍は、安土での秀吉小姓衆の無礼のふるまいを聞き、激昂した。
「筑前めが、主家に刃向かうごとき道に外れし所行は何事でや。先君信長公亡じて二歳に足らぬというに、かようの尊大なふるまいをいたすとは、許しがたし。君はずかしめらるれば臣死すと

申すだわ。このままにあいすませることがあらずか」
秀吉暗殺の謀計は家中に知らされていなかったので、秀吉の行動は許しがたい不遜とうけとられた。
信雄は帰城ののちも快々と楽しまず、不眠の夜をかさねる。三家老、老臣衆は連日城内広間で今後の方針につき、評定を重ねた。
一月も末になって、秀吉の使者富田一白が津川玄蕃の居城伊勢松坂へきた。
津川が面会すると、一白は秀吉の口上を伝えた。
「われらが主人筑前には、先日の安土のふるまいは別条他意これなく。すなわち神戸信孝公のご生害は、柴田修理、滝川左近らの讒言を信じ給い、清洲御諚をもって織田家の相続は御嫡孫三郎君がなさるると決めしをないがしろになされ、天下を望み給いしゆえにござる。
近頃中将卿におかせられては、筑前をお憎みあること迷惑このうえなき次第にて、世間の風聞にては佞臣の讒言を信じ給うとか。信孝公の自滅を前者の戒となされたしとのこと。
中将卿には早速に筑前を召し寄せられなば、実心を申しあぐべしとのことにござれば、貴殿より何分のおとりなし願わしゅう存ずる」
富田一白と津川玄蕃は、かねてより懇意の間柄であった。
玄蕃はただちに長島城へおもむき、滝川三郎兵衛に子細を告げ、相談した。
三郎兵衛は富田の口上を伝え聞き、さめた眼差しになった。
「いかにも筑前あつかましきいい分にござるだわ。日頃より御政道についてわが君をあるかなしに取りあつかい、差しでがましく計らうばかりにて、ために所司代へのお指図さえあい立たざる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com